

# 能格的なものの発展をめぐって(7)

近 藤 健 二

太平洋南方の島々に散らばる言語群は、オーストラリアの原住民諸語とニューギニア島を中心に分布するパプア諸語を除けば、ひとつの語族を構成している。それは「南の島」の語族、すなわちオーストロネシア語族と呼ばれる。オーストロネシア語族は、フィリピン、インドネシア、メラネシア、ポリネシア、ミクロネシアなどの諸地域における言語、また台湾の高砂族諸語、ハワイ島のハワイ語、さらにはイースター島のラバヌイ語、マダガスカル島のマラガシ語なども含む一大語族である。本稿は、これら南島諸語のいくつかを取りあげ、その主語の特殊な性質について論じようとするものである。なお、本稿にあげる諸言語の例文は大部分、亀井孝ほか編著『言語学大辞典』に基づくものであることを断っておく。

## 1. 主格主語の変容

ここまで、主語という語を気軽に用いてきたが、いったい主語とは何なのか。これは問うに易く、答えるに難き問題である。

主語というのは、述語という対立概念を内包する名称である。つまり主語は、述語あつての主語である。ある人がその妻との関係においてのみ夫であり、子との関係においてのみ親でありうるように、主語は述語との関係においてのみ主語でありうる。そして主語は、その関係を支える一方のみにない手、いわば主体として認識される。

主語について文法家たちの行う説明が、「最も一般的に通用しているのは、意義的には述べる事柄がそれに該当するところのものを示す部分」(松村明編『日本文法大辞典』)のように歯切れが悪かったり、「動作・作用のみにない手、あるいは性質・関係の帰属する当の事物」(国語学会編『国語学大辞典』)のように主語以外のカテゴリーにも当てはまりそうな説明になっているのは、ひとつには、主語と述語との意味的關係が一義的でないことによる。たとえば、「車が危ないから、ここで遊ぶな」における「車が」と「危ない」の意味的關係は、「子供が危ないから、スピードを出すな」における「子供が」と「危ない」の意味的關係とずいぶん離れてはいるが、ともに主語と述語の關係にある。同様に、「風が吹けば桶屋が儲かる」における「桶屋」と「儲かる」、「株が上がれば、金が儲かる」における「金が」と「儲かる」も、異なる意味的關係にありながら、同じ主語と述語の關係に置かれていると見なしうる。

ところで、ある人が親で別の人が子であることは、ある種の鑑定をすれば確かめられる。そんなことをしなくても、ふたりの顔が似ていたり、ふたりが同じ家に住んでいたら、そこに親子関係が存在することは容易に想像されよう。それではいったい、ある語が主語で別の語が述語であるとしたら分かるのであろう。主語と述語との関係は、文中にどういうふうに出しているのでしょうか。

英語を含むインド・ヨーロッパ語においては、主語の存在は明白である。というのも、主語と述語との間に一致 agreement、あるいは呼応 concord の関係が観察されるからである。たとえば英語で、The boy loves the girl 「少年は少女を愛している」に対して The boys love the girl 「少年たちは少女を愛している」というように、主語の人称・数が述語動詞の形態に影響を及ぼす。

主語の形態もまた、主語を決定するうえで重要な決め手となる。たとえば、He loves her 「彼は彼女を愛している」において he が主語であること、また She loves him 「彼女は彼を愛している」において she が主語であることは、he と she が文頭に位置していること以外に、それらが主語としての形態、すなわち伝統的に主格と呼ばれる形態を有することによって知られる。このように、主語として機能する形態を主格という。正確には、典型的に主語として機能する形態、そして主語として機能する典型的な形態が主格であるといわねばならない。なぜなら、主格は主語以外の機能も果たしうるし、また主格以外の格が主語として機能することもありえるからである。

主語と主格とを混合して怪しまない文献をそのまま見受けるので、オーストロネシア語族のことを論じる前に、両者の違いをさらに確認しておきたい。主語と主格との違いは、喩えていえば、人の役柄・立場と人の姿・格好の違いのようなものである。ある語を主語であるというのは、ある人を親であるというのに似ており、ある語形を主格であるというのは、ある人をたとえば中肉中背であるというのに似ている。このように、主語というのは語の機能面に着目した名称であり、主格というのは語の形態面に着目した名称である。格を明確に区別するラテン語を引き合いに出して具体的に説明すると、たとえば Puer puellam amat 「少年は少女を愛している」における puer は puellam amat との関係において主語、同様に Puella puerum amat 「少女は少年を愛している」における puella は puerum amat との関係において主語である。一方、puer という形態は puerum (対格) などとの関係において主格であり、同様に puella という形態は puellam (対格) などとの関係において主格である。主語と主格という用語は、少なくとも伝統的には、このような了解のもとで用いられてきた。

さて、上述の考えが逢着する当然のなりゆきとして、すべての言語に主格と呼ぶべき形態が存在するという仮定が導かれる。というのは、どんな言語にも主語と見なしうるものが存在し、その典型的形態を主格と見なしうるからである。

現実にはしかし、主格の存在は無条件に承認できるほど明白な事実ではない。いまから取りあげようとするオーストロネシア語族は、主語の典型的形態が主格であるという伝統的な枠づけをたち切ったかのように見える言語である。たとえばフィリピン諸語のなかのイトバヤトン語における普通名詞と人名の格標識、および人称代名詞の格組織は一般に以下のように記述される。

<表 1> 普通名詞と人名の格標識 (イトバヤトン語)

		話題格	目的格	属格	斜格	
普通名詞	近称・親称	i	si	ni	di	
	遠称・疎称	o	so	no	do	
人名	単数	生者	si	si	ni	di
		死者	simna	simna	nimna	dimna
	複数	生者	sira/sa	sira/sa		
		死者	siramna/ samna	suramna/ samna	niramna	diramna/ damna

<表 2> 人称代名詞の格組織 (イトバヤトン語)

	話題格 (強調形)	属格	斜格	手段格
1 人称単数	ako (yaken)	ko	jaken	ñaken
2 人称単数	ka (imo)	mo	dimo	nimo
3 人称単数	siya/ φ (siya, iya)	na	diya	niya
1 人称複数包括形	ta (yaten)	ta	jaten	ñaten
1 人称複数排除形	kami (yamen)	namen	jamen	ñamen
2 人称複数	kamo (imiyo)	miyo	dimiyo	nimiyo
3 人称複数	sira/sa (sira)	da	dira	nira

上の表に示した格のうち、まず本節では話題格と呼ばれる形態を問題としなければならない。話題格は、話題、すなわちトピック topic としての機能を果たすと一般に見なされている。下の(1)は普通名詞、(2)は人名名詞、(3)は人称代名詞が話題格として表されている例である。

(1) nangay o        tawo awi        do        takey

行った [話題格] 人    その/あの [斜格] 畑 「その/あの人は畑に行った」

( 2 ) min'akan di apsaañit si diling

食べた [斜格] アプサーニット [話題格] デイリン「デイリンはアプサーニットと食べた」

( 3 ) ninsavat ako do vaxay

戻った 私 [話題格] [斜格] 家「私は家に戻った」

表に示されているように、人称代名詞の話題格には強調形がある。これは対比的意味を表すための形態であり、一般には強調格と呼ばれる。次の例において、imo は 2 人称単数話題格の強調形として「ほかの誰でもないあなた」という意味を含意している。なお、ko は主語としての属格であるが、このことについては次節で問題にする。

( 4 ) nitawagan ko imo

呼んだ 私 [属格] あなた [話題格] 「あなたは私が呼んだ」

ところで、話題格は主格と呼ばれることがある。正確にいうと、イトバヤトン語などで話題格と呼ばれるものに相当する形態が別の言語で主格として扱われるのである。たとえば、台湾南部の山地で話されるパイワン語はオーストロネシア語族に属するが、この言語における格組織を『言語学大辞典』は以下のように記述している。

<表 3> 普通名詞と人名の格標識 (パイワン語)

	主格	属格	斜格	所格	
普通名詞	a	n(u)a	t(u)a	i+斜格	
人名	単数	ti	ni	tjay	i+斜格
	複数	tia	nia	tjaya	

注：所格では、i と斜格のいずれかを省くことができる。

<表 4> 人称代名詞の格組織 (パイワン語)

	主格		属格		斜格	所格
	自立語	付属語(後置)	自立語	付属語(前置)		
1 人称単数	ti-aken	aken	ni-aken	ku	tjanu-aken	} i+斜格
2 人称単数	ti-sun	sun	ni-sun	su	tjanu-sun	
3 人称単数	ti-madju	—	ni-madju	—	tjay-madju	
1 人称複数包含形	ti-tjen	itjen	ni-tjen	tja	tjanu-itjen	
1 人称複数排除形	ti-amen	amen	ni-amen	nia	tjanu-amen	
2 人称複数	ti-mun	mun	ni-mun	nu	tjanu-mun	
3 人称複数	tia-madju	—	nia-madju	—	tjaya-madju	

パイワン語で主格といわれるものは、強調形こそないものの、イトバヤトン語で話題格といわれるものと基本的に同じ働きをする。次の(5)は普通名詞、(6)は1人称単数の人称代名詞における主格の例である。

(5) ku            l-in-ulu        a            itju

私[属格] 拾う[完了] [主格] 柿 「柿は私が拾った」

(6) ti-amen,        payuan        amen

私たち[主格] パイワン 私たち[主格] 「私たちはパイワン族である」

この主格と呼ばれる形態に関連して、焦点 focus といわれる文法事象に触れておかなばならない。焦点というのは、後述するように筆者が視点 view-point と呼ぶ概念に相当するものであるが、いまはオーストロネシア言語学の伝統に従って焦点と呼ぶ。

パイワン語では、オーストロネシア語族の他の言語におけるのと同様に、文要素のひとつが焦点として表される。焦点化されるのは、パイワン語の場合、行為者・被行為者・場所・道具・受益者のいずれかである。重要なことは、焦点化された要素が主格であり、また主語であると見なされるということ、そしてどの要素が焦点化されるかによって述語動詞の活用が異なるということである。たとえば上の(5)の例についていうと、a itju が主格の主語であり、動詞の l-in-ulu は被行為者焦点形 patient focus である。なお、被行為者焦点形はどの文献でも目的語焦点形 object focus と呼ばれているが、焦点化されたものを主語と見なすのであれば、これはすこぶる奇妙な名称である。

以上の考察から明らかなように、同じオーストロネシア語族に属し、類似した文法現象を呈するイトバヤトン語とパイワン語の格組織が、異なる立場から、異なる装いをこらして記述されている。文中にあって同種の働きをしているはずの要素が、イトバヤトン語では話題格として、パイワン語では主格の主語として扱われているのである。

ふたつの立場のいずれが正しいかはにわかには断じがたいし、ふたつの装いのどちらに真実があるとも目下は決しがたい。というより、その両方を認めるのが妥当な態度というべきかもしれない。あるいは、話題格または主格主語と見なされるものを新たな立場から考察したならば、従来の記述に代わる適切な説明が見いだされるかもしれない。

従来の研究で抜け落ちていたものがあるとすれば、それは歴史的視野である。そして、いま課せられている課題を細大洩らさず解き明かすために取りあげるべき事柄は、焦点、すなわち筆者がその正体を「話者の関心が真っ先に向けられる要素」と規定するところの視点という文法カテゴリーの起源である。視点というカテゴリーは、たとえそれが遠古の昔から存在するものであるとしても、はじめから存在していたものではない。歴史上のある時点で生みだされたものである。では、それはどのようにして生まれたのか。その根源は何であったのか。このことに関して、筆者はこう推測する。オーストロネシア言語学で焦点といわれるものを標示する形態、すなわち、イトバヤトン文法では話題

格、パイワン語文法では主格と呼ばれる形態、そして筆者が視点と称するものを標示する形態は、もとをただせば主語を標示するための形態であった。こう考える以外、説明のよりどころをどこにも求めることはできない。

思うに、パイワン語の主語といわれるものがそもそも主語として立論される根拠のひとつは、主語と見なされる要素と述語と見なされる要素との間に一種の一致の関係、あるいは呼応の関係が観察されることである。たとえば先の(5)の例で、動詞 l-in-ulu は -in- という接中辞を有する。この接中辞は、しかし、視点化された要素を主語として設定することを正当化するものではなく、それがかつては純粹に主語であったことを示唆するものである。つまり、接中辞の -in- は被行為者を表す要素が過去の時点において主語であったことを示している。いわんとするところの意味はこうである。-in- はもともと動詞を名詞化し、生産過程ないしは生産物を意味するために用いられた。そこでたとえば、(5)の l-in-ulu は「拾ったもの」という意味の名詞、いわば動名詞であった。したがって(5)は本来、「柿は私の拾ったものだ」という意味の名詞述語文であった。それが「柿は私が拾った」という意味の動詞述語文に転じたのである。

ある種の接辞が動詞を名詞化する役目を果たしたこと、そしていまなおそのような役目を果たすことは、オーストロネシア語族の多くの言語に共通の特徴である。フィリピン諸語のひとつタガログ語でも、パイワン語の場合と同様、接中辞-in- は被行為者が視点化される際の動詞接辞としてだけでなく、生産過程ないしは生産物を表すための名詞形成接辞としても用いられる。たとえば、動詞の saing「炊く」から s-in-aing「ごはん」という名詞が派生される。視点化のための接辞と名詞化のための接辞が接中辞ではなく、接頭辞や接尾辞のこともある。たとえばタガログ語の接尾辞-an は場所または道具が視点化される場合の動詞接辞として機能する一方で、uto'「料理する」から lutu-an「料理用鍋」を、kain「食べる」から kain-an「食べる所」「食器」を派生させる接辞としても機能する。パイワン語でも、-an は場所・道具を視点化する際に用いられる動詞の活用接辞であると同時に、場所・道具を表す名詞形成接辞でもある。このように同一の形態が動詞の活用接辞と名詞形成接辞を兼ねているという事実は、文中でいわば主格補語として機能していた派生名詞が述語動詞に転じたことを如実に物語っている。なお、次のような疑問詞を含むパイワン語の構文は、主語としての派生名詞が動詞化することなしに名詞としての本来の意味をとどめている特殊な事例である。

(7) anema a ku kan-an  
何 [主格] 私 属格 食べる所 「私の食べる所はどこか」

(8) anema a ku si-kan  
何 [主格] 私 属格 食べる道具 「私の食べる道具は何か」

さて、上述のように、動詞から派生した名詞が文中で述語動詞に転じたとすれば、そ

これは主語と述語との関係にきわめて重大な変化を惹起したにちがいない。なぜなら、新しい述語動詞に対応する新しい主語が生まれ、それまで主語として機能していた要素が主語以外の要素に変化したはずだからである。

実際、オーストロネシア語族では主語が筆者のいうところの視点に変わった。正確には、主語から視点という新しい文法カテゴリーが生まれたというべきであろう。先に示した(5)の例に即していうと、a itju「柿は」の部分は主語から目的語に転じながら視点となった。しかし、(7)と(8)の例についていえば、a ku kan-an「私の食べる所は」とa ku si-kan「私の食べる道具は」はいずれも、主語であり続けながら視点という新たな機能を獲得したのである。

それにしても、このような変化はオーストロネシア語族のすべての言語において一様な速さで進行したとは考えられない。その歩みが比較的ゆるやかであったと推察される言語としてたとえばパイワン語があげられよう。パイワン語文法では、前述したとおり、主格という用語が用いられるが、これはパイワン語の主語・述語関係がいくぶん古体性をとどめていることと無縁ではあるまい。一方、ポリネシア諸語では主語から視点、主語マーカーから視点マーカーへの変化は比較的すみやかであったと想像される。というのも、たとえばトンガ語では視点マーカーが次のような現れ方をするからである。

(9) ko fē na'e 'i-ai e falé

〔視点〕どこ〔過去〕ある〔冠詞〕家「どこにその家はあったか」

トンガ語はサモア語などのポリネシア諸語では、パイワン語などの高砂諸語やイトバヤトン語などのフィリピン諸語とは違って、視点化されたものが文頭に置かれる。そして注目すべきことに、上の(9)に示したとおり、視点マーカーが疑問詞にまで付される。疑問詞というのは話題として機能しない。むしろ、それとは正反対の存在である。すなわち、疑問詞は文中で「もっとも重要な情報を表す要素」としての焦点である。このようにトンガ語などにおいて視点マーカーが明白な焦点要素に付せられるという事実は、視点マーカーが日本語の「は」に代表されるような話題マーカーと性質をやや異にするものであることを示唆している。また同時に、トンガ語などの言語が問題の言語変化に関して他言語に先行していることを傍証している。

ここでいま、トンガ語やサモア語において視点マーカーがなぜ疑問詞にまで付せられるようになったかを考えてみよう。繰り返し述べるように、視点とは「話し手の注意が真っ先に向けられる要素」のことである。しかし視点は、トンガ語やサモア語のように視点化された要素が文頭に位置する言語においては、「聞き手の注意が真っ先に向けられる要素」でもあり、また「聞き手に注意を真っ先に向けさせる要素」でもある。とすれば、そのような要素を標示するための形態、つまり視点マーカーが焦点要素、つまり「もっとも重要な情報を表す要素」に付加されるようになってもお不思議ではない。なぜなら、

「もっとも重要な情報を表す要素」は話し手が聞き手に対して「真っ先に注意を向けさせたい要素」と一致するからである。ただし、それは「もっとも重要な情報を表す要素」が文頭に置かれる場合に限られる。文中あるいは文末の要素は、それに対して「聞き手の注意を真っ先に向けさせる」ことはそもそも不可能である。トンガ語やサモア語において疑問詞に視点マーカーが付せられるようになったのは、要するに、疑問詞が「もっとも重要な情報を表す要素」であることに加えて、それが文頭に置かれるために、「聞き手の注意を真っ先に向けさせたい要素」として認識されるに至ったからであろう。

ところで、焦点要素が視点化されるのは疑問詞だけではない。ポリネシア諸語では、次のサモア語の例におけるように、名詞述語文の述語に視点マーカーを添加するのが通例のようであるが、これもおそらく疑問詞が視点化されるのと同じ理由によるものであろう。すなわち、文頭にあって焦点要素となる述語に対して「聞き手の注意を真っ先に向けさせる」ために、視点マーカーが付加されるようになったものと思われる。

(10) 'o le tama poto

[視点] [冠詞] 少年 賢い 「賢い少年だ(彼は)」

ここまでオーストロネシア語族における主語が視点というべきものに変容したことについて述べてきたが、このことに関連して、日本語のある種の助詞が視点マーカーらしきものであるという事実を指摘しておきたい。「ある種の助詞」とは、話しことばで使われる「ね」「さ」「な」「よ」のことである。先にあげた(1)~(4)のイトバヤトン語、(5)~(8)のパイワン語、(9)のトンガ語、そして(10)のサモア語の例がこれらの助詞を添えて訳出できることを下に示してみよう。

(1') nangay o tawo awi do takey 「その/あの人<sup>は</sup>ね、畑<sup>に</sup>行った」

(2') min'akan di apsañit si diling 「ディリン<sup>は</sup>な、アプサーニットと食べた」

(3') ninsavat ako do vaxay 「私<sup>は</sup>さ、家<sup>に</sup>戻ったんだ」

(4') nitawagan ko imo 「あなた<sup>は</sup>ね、私<sup>が</sup>呼んだんだ」

(5') ku l-in-ulu a itju 「柿<sup>は</sup>ね、私<sup>が</sup>拾ったんだ」

(6') ti-amen, payuan amen 「私<sup>たち</sup>はな、パイワン族だ」

(7') anema a ku kan-an 「私<sup>が</sup>食べる所<sup>は</sup>さ、どこ<sup>な</sup>んだ」

(8') anema a ku si-kan 「私<sup>が</sup>食べる道具<sup>は</sup>さ、何<sup>な</sup>んだ」

(9') ko fē na'e 'i-ai e falé 「どこ<sup>に</sup>さ、その家<sup>は</sup>あったんだ」

(10') 'o le tama poto 「賢い少年<sup>だ</sup>よ(彼は)」

次に、タガログ語の構文とその日本語訳を比べながら、問題の助詞が視点マーカーとして機能しているかどうかを確かめてみよう。

(11) a . mag-laba ka ng damit

洗う あなた[視点] [斜格] 着物 「あなた<sup>ね</sup>、着物を洗いなさい」

b . labh-an mo ang damit

洗う あなた[斜格][視点] 着物 「着物をね、あなた洗いなさい」

上の(11a)のタガログ語では、kaが視点化されていて、これに「あなたね」という訳語をあてることができる。しかし、視点化されていないdamitに「着物をね」という訳語をあてられない。一方、(11b)ではdamitが視点化されていて、これを「着物をね」と訳すことはできても、視点化されていないmoを「あなたね」と訳すことはできない。このように視点化された要素は「ね」を付けて訳出することができるけれども、視点化されていない要素はそれができないという事実から、「ね」は視点マーカーに類する働きをするといえよう。同じことは、文体上の差異こそあるものの、「さ」「な」「よ」についてもあてはまる。

考えてみれば、「ね」「さ」「な」「よ」はいずれも文末において「確認」や「念押し」の機能を果たす助詞である。つまり、これらの助詞は、話し手の述べる事柄が「真」であることを聞き手に確認したり念押ししたりするのである。しかしもちろん、これらの助詞のすべてが完全に同じ意味を表すわけではない。それらには、文体上の差を超える差異が認められる。たとえば、「よ」は「きのうは雨が降ったよ」のように原則として聞き手が承知していないはずのことを述べる際に用いられるが、「ね」や「さ」は反対に、「きのう雨が降ったね」のように聞き手が承知しているはずのことを述べる際に用いるのが通例である。

しかしこのような使い分けは、同じ助詞を語末あるいは句末に用いる場合、すなわち一種の視点マーカーとして用いる場合には、行われぬ。そして、文末において認められる「確認」と「念押し」の意味も存在しない。そもそも語あるいは句が表す内容は、真偽を問う対象とはなりえない。そこで、語末・句末の「ね」「さ」「な」「よ」は聞き手に「確認」を求め「念押し」をするのではなく、聞き手の「注目」を引き「注意」を喚起するという働きをするのである。これはまさしく、オーストロネシア語族の視点マーカーが担っているのと本質的に同じ機能である。

日本語の「ね」や「さ」の使い方は、とくにトンガ語のkoやサモア語の'oの用法に似ている。フィリピン諸語や高砂諸語では視点化が義務的であり、文中のある要素を視点として仕立てなければ文は成立しない。一方、トンガ語やサモア語では視点化が随意的であり、文中のある要素を視点化してもしなくてもよい。日本語でも事情は同じである。もっとも、日本語では視点化される要素の種類が多彩であり、「その後でね」「ゆっくりとさ」「そうすればな」のように、あらゆる種類の副詞的表現に「ね」や「さ」や「な」を付加できる。また、「ね」のかわりに「ですね」、「な」のかわりに「だな」を用いて「太郎はですね」「太郎はだな」などといったり、さらには文頭に取り立てるべき適当な語が思いつかないときに「あのね」「あのさ」などといったりするが、これらも

日本語の特殊な視点化現象の例であるといえよう。

日本語特有に見えて実はそうではない視点化現象について一言しておきたい。それは、「太郎がね、ガラスを割ったよ」のように「が」の後に問題の助詞が現れる場合である。「が」は話題マーカ―ではないので、「太郎がね」の部分はオーストロネシア語族では視点要素として表されないとされるかもしれない。しかしそれは、「太郎はね、ガラスを割ったよ」の「太郎はね」と同様に視点化される。要するにオーストロネシア語族では、「太郎がね」と「太郎はね」を区別しないで、「太郎ね、ガラスを割ったよ」のように表現するのである。それにしても、日本語における「が」を伴う非話題要素がオーストロネシア語族における視点要素と対応するという事実は、視点化と話題化が同一の概念ではないことを明確に裏付けている。

## 2. 属格主語と能格主語

上で触れたように、パイワン語では主格主語といいうるものが比較的遅くまで保持されたと考えられる。しかし、現在のパイワン語にかつての主格主語をそのまま認めるわけにはいかない。というのは、パイワン語の動詞がその相 aspect と法 mood に応じて、また文中のどの要素が視点化されるかによって、次のように活用するからである。

<表 5> 動詞の活用 (パイワン語)

視点 相/法	行為者	被行為者	場所	道具・受益者
中立	{-em-}	{-en-}	-an	si-
進行	R-{-em-}	R-... {-en}	R-... -an	si-R-
完了	na-{-em-}	-in-	-in... -an	s-in-i-
意図	uri-{-em-}	-av	-ay	si-... -an
接続	ゼロ	-i	-i	-an
命令	-u	-u	-i	-an

このような活用は動詞の特徴である。したがって、このように活用する語の品詞はどうやら動詞ということになり、たとえば先の(5)における l-in-ulu は lulu「拾う」という動詞の、被行為者が視点化された場合の完了相ということになる。つまり(5)は、先にも述べたように、名詞述語文ではなく、動詞述語文であると見なされる。同様に次の(12)も、もはや「あなたの手は私の縛る場所だ」という意味の名詞述語文ではあるまい。それは動詞述語文として、「あなたの手、私が縛ってやる」という意味を表す文として解釈されるべきであろう。ただしこのような意味解釈には、この構文が能動文で

あるという前提条件が付いている。

(12) ku qadjay-ay a su Lima

私[属格] 縛る[意図] [視点] あなた[属格] 手 「あなたの手、私が縛ってやる」

ところで、名詞的なものが動詞的なものに転化する事例は日本語のなかにも観察することができる。たとえば、「昔はよく釣りに行ったものだ」「宿題は今日中に片づけるつもりだ」「彼が怒るはずだ」における「もの」「つもり」「はず」はもともと名詞であるにもかかわらず、動詞に添加されて「過去の習慣」「意図」「必然」などを表すようになっていく。つまり、名詞であったものが動詞接辞のようなものに変質し、結果として本来は名詞述語文であったものが動詞述語文と称するものに変質したが、変質しかかっているのである。

ついでに、英語の動名詞 *gerund* の歴史に触れておこう。というのは、英語の動名詞もまた名詞が動詞的性格を獲得して成立したものにほかならないからである。

英語の動名詞は、古期英語では *-ung(e)* という接辞を有する動作名詞であったが、中期英語において著しい発達を遂げた。まず、ほとんどすべての動詞から動名詞を作ることができるようになった。そして、動名詞は動詞的性格を次第に強く帯びようになっていった。こうして、(the) *cooking of fish* のような表現が生まれ、続いて (the) *cooking fish* のような目的語を伴う表現が可能となった。また、属格名詞を動名詞の意味上の主語とする *my mother's cooking fish* のような用法が発展して、主格名詞を動名詞の意味上の主語とする *my mother cooking fish* のような用法が生まれた。

英語における動名詞の発達過程はオーストロネシア語族における主語の特性を考えるうえで示唆的である。英語において動名詞の主語がもともと属格名詞で表されたのは動名詞がまさに名詞であったからにほかならない。また動名詞の意味上の主語として主格名詞の使用が可能となったのは、動名詞が動詞的性格を強めることによって、動名詞と属格との間に明確な主述関係が意識されるようになったからであろう。上においてオーストロネシア語族のパイワン語を引き合いに出し、問題の派生名詞が動詞的なものに転じたことと述べたが、このことはとりもなおさず本来は形容詞的な修飾語として機能した属格名詞あるいは属格代名詞が別の機能を果たすようになったことを意味している。それはいうまでもなく主語としての機能である。オーストロネシア語族の場合にも、属格が主語として機能するようになったのである。先の(5)における *ku* は、また上の(12)における *ku* も、このような属格主語の例である。

それにしても、属格が主語の役目を果たすからそれを属格主語と称するのは、通時的観点を取り入れた呼び方である。完全に共時的立場に立てば、主語としての形態は主格であると立論することも可能である。というより、そういうふうを考える方が筋の通った論となる。そこで当然、属格主語を主格主語扱いする文献も存在する。たとえば、

フィリピン諸語のひとつであるイスナグ語の格組織を記述するのに、『言語学大辞典』は主格と属格が同形であるとしている。つまり、イトバヤトン語やパイワン語の属格に相当する形態に「主格・属格」という名が与えられている。仮にこういう命名法に従えば、上の(12)における ku は主格、su は属格ということになる。ついでながら、イトバヤトン語文法で話題格、パイワン語文法で主格と呼ばれるものに相当するイスナグ語の形態はイスナグ語文法では焦点格と呼ばれる。

さて、派生名詞が動詞の方向への傾斜を呈するにおよんで、属格が主語以外の機能をも果たすようになった可能性を考慮しなければならない。それは、副詞的修飾語としての機能である。ここまで問題の構文が能動文であることを前提に論を進めてきたが、反対にそれが受動的な意味を表すものであるならば、属格は「～によって」という具格的意味を表す副詞的要素ということになる。ちなみに、『言語学大辞典』はイトバヤトン語の、被行為者が視点化された下の(13b)、手段が視点化された(13c)、場所が視点化された(13d)などを「受身文ともいえる」と述べている。

- (13) a . koman o tawo so rawot no lima do vaxay  
 食べる [視点] 人 [目的格] 粟 [属格] 手 [斜格] 家  
 「(その)人は家で手を使って粟を食べる」
- b . kanen no tawo o rawot no lima do vaxay  
 食べる [属格] 人 [視点] 粟 [属格] 手 [斜格] 家
- c . i'akan no tawo so rawot o lima do vaxay  
 食べる [属格] 人 [目的格] 粟 [視点] 手 [斜格] 家
- d . kakkaanan no tawo so rawot no lima o vaxay  
 食べる [属格] 人 [目的格] 粟 [属格] 手 [視点] 家

上の(13b)~(13d)を受動文と見なすとして、それならばどのような事実を目して、そのような立場をとるのか。なるほど(13d)については、被行為者が視点化されているという点に注目すれば、それは受動文と思われるかもしれない。というのも、典型的な受動文では被行為者が主語として表され、視点化されるからである。一方、(13c)と(13d)において視点化されている手段と場所はそもそも「行為を被る」類のものでなく、したがって意味的にはそれらを受動文と見なすことはできそうにない。

形態面に注目すると、(13b)~(13d)を受動文とする根拠は一層薄弱である。それらには日本語の「れる・られる」に相当する形態、あるいは英語の過去分詞に相当する形態は見当たらない。この点で、筆者はそれらが「受身文ともいえる」という見解に引きみすることはできない。

しかしながら、イトバヤトン語に受動文を認めないということは、派生名詞の動詞的性格の獲得が受動態発達の端緒となり基礎となったという設定をくつがえすものとはな

りえない。またそれは、オーストロネシア語族に受動文が存在しないことを意味するものでもない。実際のところ、西部オーストロネシア語族に属するムラコ語（インドネシア語もマレーシア語もその変種である）にも、ムラノウ語（マレーシア連邦の一部地域に分布する）にも、カイリ語（トラジャ諸語のひとつでセレベス島などに分布する）にも受動文は存在する。標準ムラコ語では di- による形式、ムラノウ語では -en- による形式、カイリ語では ni- による形式によって受動態が標示される。次の（14）と（15）はカイリ語の能動文、（16）はそれを受動文に変換した例である。

(14) ku-kita            mo    bau hai  
       私 属格 } 見る [過去] 魚    その 「私が見たんだ、その魚」

(15) bau hai    ku-kita            mo  
       魚    その    私 属格 } 見る [過去] 「その魚、私が見たんだ」

(16) bau hai    ni-kita-ku            mo  
       魚    その    [受動] 見る-私 属格 } [過去] 「その魚、私に見られた」

上の（13）と（14）における ku-kita のような添頭辞 proclitic としての属格は、カイリ語では能動文の主語を表す。一方、（16）における ni-kita-ku のような添尾辞 enclitic としての属格は受動文の行為者を表すか、さもなくば名詞に付加されて所有者を表す。

『言語学大辞典』は、添頭辞形を用いる構文について「動詞語幹が表す事態そのものに焦点がある」という「通説」に触れながら、「詳しいことは分からない」としている。この点についての筆者の理解はこうである。たとえば（14）と（15）において、bau hai は視点マーカーこそ付いていないけれども視点である。一方、「属格修飾語 + 名詞」から「属格主語 + 動詞」という構造に転じた ku-kita は、オーストロネシア語でいうところの焦点ではなく、談話文法や機能文法でいうところの焦点、すなわち「文中でもっとも重要な情報を表す要素」としての焦点である。厳密にはしかし、ku-kita の ku- が焦点の場合と、-kita が焦点の場合と、ku-kita 全体が焦点の場合とがあるといわなければなるまい。なお、主語が代名詞で、それを視点として表したいときには、視点を表すための特別な形態が用いられる。この場合、焦点はいうまでもなく述語の部分である。たとえば次の例において、焦点要素は動詞か目的語、あるいはその両方である。

(17) yaku        kita    mo    bau hai  
       私 視点 } 見る [過去] 魚    その 「私、その魚を見た」

話をもとに戻そう。受動文の有無に関して、カリン語などにはそれが存在し、イトバヤトン語などにはそれが存在しないという考えは十分に妥当なものである。しかし、これには若干の補足が必要である。なるほど受動態マーカーはオーストロネシア語族の多くの言語に欠落しているけれども、受動的意味そのものは存在するし、存在した。正確にいえば、存在するようになったはずである。そうなったからこそ、その意味を明示す

るための専用の形態が一部の言語に生まれたに違いない。つまり、同一の形態が能動と受動という異なる意味を内包するに至ったことが形態の分化を惹起し、受動態マーカを生み出したと考えられるのである。このような推論は、次の結論を導く。行為者を属格で表すオーストロネシア語族の動詞述語文は、受動態を有しない言語にあっては、能動と受動の両方の意味を包み込んでいる。そのような構文において、属格は二価的で曖昧な機能を果たしている。すなわち、属格は行為者を主語として表しているのか副詞的なものとして表しているのか、それが曖昧である。

もっとも次のイトバヤトン語の例におけるように、自動詞とともに用いられる属格は、それが本来の形容詞的機能を残しているという可能性を無視すれば、明瞭に主語としての機能を果たしている。

(18) kangoh o naka'savat mo di vaxay awi  
 いつ [視点] 到着した あなた[属格][斜格] 家 この「あなたがこの家に到着したのはいつか」

ところで、属格が受動文の行為者を表すということは、属格が具格的ないしは奪格的な機能を発揮するというにほかならない。なぜなら、受動文における行為者は本来、具格か奪格、あるいはそれに相当する形態によって表されるからである。たとえば、英語では具格的な前置詞 *by* によって、ラテン語では奪格的な前置詞 *ab* によって表される。実は、オーストロネシア語族にも、そのような形態を用いて行為者を表す言語が存在する。たとえば、サモア語ではそれを以下のように *e* という形態によって表すが、これは英語の *by* に相当する前置詞であり、*of* に相当する *a* または *o* とは明確に区別される。

(19) na a'a-fia le pōlo e le tama  
 [過去] 蹴る[受動][冠詞] ボール [具格][冠詞] 少年 「そのボールはその少年によって蹴られた」

オーストロネシア語族の全体的状況を考慮すれば、サモア語において受動文の行為者を表すのに用いられる *e* という前置詞は属格にとって代わったものであると想像される。つまり、属格を具格的に用いてきた場に本来の具格が、あるいは具格に相当する前置詞があてられるようになったと考えられるのである。このような変化の過程は、たとえば古期英語の *Beowulf* 1439: *nīða genæded* (力によって攻撃され) のような具格的属格が *Beowulf* 2680: *nīþe genyded* (力によって強制され) のような具格的与格に駆逐され、この具格的与格が今度は *assailed by force* のような具格的な前置詞句にその席をゆずることになった変化の過程と本質的に同じである。

ここで、話題をやや転じ、受動文と能格構文との関係について述べておこう。サモア語やトンガ語に能格構文が存在するというのはもとより筆者の創見ではないけれども、その構文が歴史的に受動文と浅からぬ関連を有するという事実は案外と知られていな

い。下に例示したサモア語の能格構文と上の(19)の受動文とを見比べてみれば、両者が相互に分断しえない関係にあることは容易に理解されるであろう。

(20) na a'a e le tama le pōlo

[過去] 蹴る [能格] [冠詞] 少年 [冠詞] ポール 「そのボールはその少年が蹴った」

能格構文と受動文とが歴史的に関連しあうものであるとして、問題は、その関連性の中身である。具体的に問題設定をするならば、こういうことである。能格構文は受動文から生まれたのか、反対に能格構文が受動文を生んだのか、それとも能格構文と受動文は共通の何かから分岐して生まれたものなのか。この点に関して、筆者は以下のように考える。

ある文が受動文であることを標示する主要な形態は動詞に付せられている受動態マーカ―であり、副次的形態は行為者を表す語に付せられる行為者マーカ―である。サモア語の場合、受動的意味を明示するのに、最初は後者の形態が選ばれた。すなわち、具格的な前置詞 e を行為者マーカ―として用いる方法が採用されたのである。続いて、サモア語では、受動態マーカ―の (C ʔ i ) a ( C は環境によって異なる現れ方を示す子音を表す) を動詞に付すことによって受動性を一層明瞭に標示する方法がとられることになった。しかし、この受動態マーカ―は行為者マーカ―を含むすべての文において一斉に用いられるようになったわけではない。そこで、行為者マーカ―の e と受動態マーカ―の (C ʔ i ) a の両方を含む完全な受動文と、行為者マーカ―の e だけがあって受動態マーカ―の (C ʔ i ) a を欠いた不完全な受動文とが並存するようになった。その結果、前者は明確な受動文として見なされるに至ったが、後者は反対に受動文であることを忘れられ能動文へと傾いていった。つまり、(C ʔ i ) a のみが受動文を標示する形態として一方的に機能することによって、それを含む文は受動文に、それを含まない文は能動文に区分けされることになった。こうして行為者マーカ―の e は、一方において受動文の行為者を標示する形態としてとどまったが、他方において能動文の行為者、すなわち他動詞文の主語を標示する専用の形態となったのである。このように、サモア語における能格構文の起源は、行為者マーカ―の e があって受動態マーカ―の (C ʔ i ) a を欠いた受動文の未開形態にこそ求められねばならない。

本稿を閉じるにあたって、オーストロネシア語族における能格構文の未来についてふたつの予測を述べておきたい。ひとつは、能格構文が受動文と同様に被行為者を視点とする構文であるということ、したがってそれが競合関係にある受動文によって駆逐される可能性があるということである。もうひとつは、サモア語の能格構文が受動文の発生を通じて生まれた歴史の浅い構文であるということ、したがって受動文の発達が将来に期待されるオーストロネシア語族の多くの言語が能格構文を生み出す可能性をうちに秘めているということである。